



第 46回東京モーターショー2019が11月4日、閉幕した。10月24日の開幕から12日間、業界の枠を越えて、グローバルに活躍する192の企業・団体がクルマ・バイクの魅力をはじめ、新たなモビリティ社会の未来を提案・発信し、前回は大幅に上回る130万人もの来場者がモーターショーを楽しんだ。今回はメイン会場を2つのエリアに分けたり、無料の大規模イベントを企画したり、e-Motorsportsやドローンをショーに取り入れたり、新しい取り組みにチャレンジした。主催した日本自動車工業会では、「今回のチャレンジを2020年の『東京オリンピック・パラリンピック』、さらに翌年の『第47回東京モーターショー2021』へつなげていきます」としている。

令和最初の開催となった今回の東京モーターショーは、開催2日前に「即位の礼」が執り行われるなど、新たな時代の幕開けを実感させるものだった。電機メーカーやベンチャー企業など異業種と連携し、最先端テクノロジーを駆使したシンボルイベント「FUTURE EXPO」では、近未来の移動や都市生活、スポーツ観戦などを無料で体験することができ、子どもたちや海外からの観光客が長い列を作った。自工会によると、約50万人近くの来場者が近未来モビリティ社会を体験したという。

また、「キッザニア」との初コラボによる子ども向け職業体験型施設「Out of KidZania in TMS2019」には、約1万人の子どもたちが参加。会場の青海展示棟では、カートを引いた親子連れの姿がよく見られた。「FUTURE EXPO」の会場でもあるMEGA WEBでは、e-Motorsportsの世界ナン

バーワンプレイヤーを決める「FIA グランツーリスモ チャンピオンシップワールドツアー」も開催され、大勢の若者たちが熱狂した。有料会場の東京ビックサイト展示棟などでは、高校生以下は無料としたこともあり、制服を着た高校生や課外授業で来場した小中学生のグループがいたところで目についた。新たな時代を担う、若い世代に開かれたショーでもあった。

期間中、お台場では、電動キックボードやパーソナルモビリティがメイン会場がある有明エリアと青海エリアを行き交い、大勢の来場者がキッチンカーで食べ歩きをし、500機ものドローンが宙を舞うなど、これまでの東京モーターショーでは見られなかった光景がいろいろな場所で広がっていた。

自工会の豊田章男会長は、モーターショー閉幕翌日の5日、130万人の来場者に感謝の気持ちを伝えるとともに、「2020年、今回の会場のまわりはオリンピック・パラリンピックの選手村になります。ここでは、今回見ていただいたような未来のモビリティたちが走りはじめます。さらに、その1年後の2021年には、次のモーターショーを予定しています。今回、見ていただいたモノたちが、これからの2年でどれだけ進化をするのか、皆さま、想像してみてください。われわれは、その想像を遥かに上回るようなモノを2年後のモーターショーで、また提案したいと思っています。皆さまの驚く笑顔想像しながら、われわれはもっと頑張って、ものづくりを進めてまいります」と述べ、さらなるチャレンジに意欲を見せた。